

# 湊江小学校 外国語活動・外国語科研究通信

第2号

令和5年6月

今年度第2回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を 兵藤 魁教諭が行いました。協議会では、一つ一つの活動や中間指導、絵本の活用について活発な意見交流を行いました。指導・講評では、文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子先生よりご指導いただき、研究を深めました。

## 研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:3年1組 担任 兵藤 魁教諭

単元名:Let's try! 2 Unit 4 I like blue.

指導講評:文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子先生より



### 〈研究経過報告〉

#### 研究の視点について

##### 視点1 コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確にした言語活動の工夫

児童が意欲的に活動できることを大切にしたい。今まで担任してくれた先生方は異動してしまっているため、自分たちのことを知っている先生が少ない。そこで湊江小学校の先生たちに好きなものを紹介するという目標を設定した。

##### 視点2 表現を繰り返し使うための工夫

3年生なので楽しんで、英語に自然に親しめたい。体を使いながら既習事項が思い出すことができるように色探しゲームや絵本を活用することにした。また、1時間目から3時間目まで聞く必然性がでるような学習活動をめあてとして取り入れ、活動している中で繰り返し新出表現を使っていたというような単元構成を考えた。しかし、活動がメインのめあてにならなかった。「オリジナルバタフライを作ろう」ではなく、「オリジナルバタフライを作るために好きな色を伝え合おう」にしたなら、具体的な授業の振り返りができたのではないかなと思う。

##### 視点3 効果的な中間指導

中間指導で自分が言いたいこと、友達が言っていることを聞いたり言ったりしながら新出表現を自然に繰り返し使っていけるようにした。既習表現や既習語句が少ないなかで、どのように中間指導を展開していくのが課題である。

#### 〈授業者自評〉

子供たちが楽しそうに取り組んでいた。生き生きと活動できてよかった。反省点としては、時間が伸びてしまった、めあてを出すタイミングが予定とは違ってしまい、めあて提示から色探しゲームを行うまでがスムーズにいかなかった、子供の意見をもっと拾って解決し、広めることができたならよかった。具体的には、中間指導の時に「黄緑」を「Yellow green」と言ってくれた意見を取り上げたが、その後みんなで一緒に言わなかったの言えればよかった。

#### 〈研究協議会〉

##### 一つ一つの活動、単元目標について

・めあてに向かってできていない。何のためのやり取りなのか。何のための活動なのか。

絵本「Beautiful butterfly」の読み聞かせの後、色探しゲーム、好きな色を伝え合うやり取り活動を行い、再び絵本の内容のバタフライに戻った。流れが切れてしまって活動が一直線につながっていなかった。一つ一つの活動のめあてがはっきりしていなかったから、何のためにやっているのか児童にわかりにくかった。ただ楽しいだけになってしまった。もっと深い学びにつなげたかった。

→協議会で出た一つの案:最初に色探しゲームをする。たくさん色に触れた後で絵本「Beautiful butterfly」の読み聞かせを行い、オリジナルバタフライを作ることにつながる。

・単元目標を最後に提示したのはなぜか。最初に提示して、どんな好きなことを伝えたい?と投げかけ、いろいろ出てきた後に、その中で今日は色の言い方を学ぼう、としたらどうか。

→(兵藤先生)最初に提示するとこちらから発信になる。児童が自発的に考えた、児童からの発信にしたかった。

⇒直山先生

・単元目標を最初にするか最後にするかはケースバイケース。今日は、色の他に好きな何を伝えたい?と児童に投げかけ、いろいろなものが出てきた。児童発信になっていた。次につながるという意味で最後でよかった。振り返りにも、次への期待が書かれていた。

・色探しゲームは、色をどれだけ聞かせるか、数をどれだけこなすか。テンポよく行うことが重要。また、わざと児童が分からないような色を言ってもいい。しかし、このゲームは効率が悪い。

### 絵本の活用 オリジナルバタフライ作りについて

・オリジナルバタフライを作った後、色の確認があったほうがよかった。

・オリジナルバタフライを作るときの折り紙を配る役を中学年部会の他の先生がやっていたが、児童にやらせたらもっとやり取りができたのではないかと。また、折り紙ではなく、シールをたくさん用意しておき、何度も貼ることができるようにすれば何回も「I like ~.」が言えたり、何種類も色を言ったりしたのではないかと。

⇒直山先生

・自然に色を言わせる、色の言い方を思い出させることがねらいで絵本の読み聞かせをした。ならば、児童のことをよく分かっている担任は、学習者の立場に立って(児童と一緒に座って)児童のつぶやきをリードする。児童の発言をうまく引き出す。

・児童のつぶやきをうまく利用して次の活動につなげる。今回は、最後の白いバタフライの絵を見た児童が「Oh!No!」「No color!」とつぶやいていた。→「じゃあ、みんなできれいなバタフライを作ろう」とつながられた。

### ペア活動、中間指導について

・活動前にもっと練習した方がよかったのではないかと。何をしたらよいか分かっていない児童がいた。ペアのどちらから質問するかだけでも決めておけば戸惑いがなかったのでは。答え方も練習しておいた方が良かった。

・何回もデモンストレーションを示したらよかった。中間指導ありきになっていないのではないかと。活動に入る前に、もっと手立てをうって、それでもできない児童に対してさらなる支援を行う。

・まず活動させて、児童が困る場面を作ったことで練習の動機づけができていた。

→(兵藤先生)児童から「困った」を引き出すのを狙った。ほとんど言えないだろうとは思っていて中間指導で練習しようと思っていたが、予想以上に言えていなかったため、すぐに声をかけて質問の仕方の確認、練習をした。

⇒直山先生

・「言いたいけど言えないから知りたい」

色の名前以外で何が出てくると予想できるか。

→「ぼくも、私も」「Me, too」を覚えておくと、その後のグループ作りにも使えた。

・「黄緑」を英語で何というか。

→児童から Sky blue, Yellow green が出てきた。児童が言ったことをほめた上で、さらに Light blue, Light green を教える。そうすると汎用性が高い。今後、いろいろな表現に使うことができる。このようなことを用意しておくことが教材研究。

〈指導・講評：文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子先生〉

### 教材研究、シミュレーションを十分に

・教材研究を十分にを行い、児童の反応を予想し、その上で授業の展開を考える。

### 一つ一つのめあてを明確にする

・一つ一つの活動のねらいがはっきりしていないと、児童が「これは授業ではない」と思い、意欲がなくなる。

### 的確な指示

・クラスルームイングリッシュを使うことも一つの策。

☆児童の大事な45分を借りている。楽しいだけの授業をしてはいけない。一つでもできることが増えて帰らせることが私たちの仕事。

☆自分が行った授業について、細かいことまで覚えていて、振り返られる先生は、力のある先生。

☆教室は間違えるところ。間違えたことからお互いが学び合える。→「学級集団」「学習集団」を作る!